

小室怡々斎襖絵の修復

金森正也*

木村明夫**

1 はじめに

秋田県立博物館では、リニューアル工事にともない、昨年度および今年度の二年間にわたって、近世商家にかかわる資料調査を集中的に行ってきたが、その過程で、小室怡々斎の作品と判断される襖絵を確認することができた。周知のように、小室怡々斎は秋田の近代日本画の基礎を築いた画家であり、¹したがってその作品リストにあらたな一点を付け加えることになる同作品は、歴史的に見ても貴重なものといえる。ただ、同資料は、以下に述べるようにきわめて保存状態が悪く、大幅な修復作業を必要とした。本報告は、その修復作業の経過をまとめたものである。

近年資料保存の大切さが一般においても認識されるようになってきたが、その正しい修復のあり方などについては必ずしも正確に理解されているわけではない。そうした現状を考えると、資料修復の一例を示すことは、資料修復のあるべき姿を正しく理解するための一助になると考える。なお、このレポートは、修復作業にあたられた木村明夫氏が作成された報告書にもとづいて、金森が文章化したものである。なお、関連写真は、文末に一括して掲載し、文中に適宜写真番号を付記する。

2 資料の概要

資料を所蔵されていたのは、秋田市土崎港で薬品店を営まれている加藤綾氏(舩屋薬局)である。同薬局は、創業文久2年(1862)と伝えられる旧家である。今回、近世商家の営業と生活に関する調査をさせていただいたところ、同資料に接し、加藤氏のご好意により県立博物館に寄贈していただいた。前述のように傷みが進んでいるために当初廃棄するご予定であったものを、もし資料として利用できるのであればというご判断から、その

扱いを博物館側に一任していただくことができたものである。

作品は、4面続の襖絵であり、表面に「松鷹図」(仮題)(修復前写真1~4)、裏面に「芦雁図」(仮題)(修復前写真5~8)が描かれている。「松鷹図」の第一面右端に「壬午春日応需 怡々斎秀俊」という署名と落款があるところから(写真9)、小室怡々斎による明治15(1882)年の制作と判断される²。以下に作品の仕様をまとめておく。

形式：紙本着色、墨、四枚立両面幅広襖

寸法：本紙) 171.0×428.0cm×2面

襖骨) 171.0×107.0cm×4枚

椽、見付) 2.7cm

椽、見込) 1.8cm

材質：本紙) 画仙紙

椽) 杉

骨格) 秋田杉

引手) ブリキ、真鍮

作品は、画仙紙に墨、顔料、岩絵の具が使用されている。幅広の襖のために1枚物の紙がなく、全紙巾の画仙紙を3枚横に継いだである。このうち、上と中が2尺5分、下が1尺5寸となっている。襖は、画と同じく明治15年に製作され、その後一度も修理されることなく現在まで保存されていたものと判断される。

3 破損状態に関する所見

本紙の損傷は、襖として使用していた時期と、後に蔵に収納されていた時期とに分けて考えることができる。本紙全体に糊が洩れ、糊離れが見られる。これにより下張りまで剥がれ³が及んでいる。また、全体に、破れ⁴、欠損、亀裂などの傷み⁵があり、「松鷹図」の第二面の上部には横に長い亀裂がある。その他虫害による虫喰い⁶穴、

*秋田県立博物館 Akita Prefectural Museum **木村表装店・一級技能士

本紙表面のナメ⁷、虫の営巣痕などの傷みも見られる。

本紙全体に、焼け⁸（写真10）、煤⁹、染み¹⁰などの変色が見られ、「芦雁図」の第四面の下部には水による染みがはっきりとあらわれている（写真11）。また、表面は、中の第二面と三面、裏面は左右の第一面と四面が、焼けによる変色がはげしい。これは、襖を開いておいた状態が多かったためと考えられる。他に、子供の鉛筆を用いた落書きと思われる汚れもある。

後に蔵に収納されてからは、湿気によって白カビが本紙全面にはげしく発生し（写真10）、それらは、下張りや襖骨の中にまで見られる状態である。さらに、襖は横に立てて保存されていたものと思われ、湿気のたまった下部にあたる部分には黒カビが生え（写真12）、画仙紙の一部が腐敗した状態になっている。また、湿気は引手を酸化させ、鉄サビが本紙にまでおよんでいる。くわえて、本紙の焼け、煤けた面にたっぷり湿気が入ったことにより、煤による汚れが模様のように本紙全体ににじみ出ている。

襖も老朽化し、椽もそったり一部欠損したりしている。また、襖骨に椽を打ち付けている折合釘（イナズマ）はすべて錆ついていて、はずすのが容易ではない状態であった。

4 修復の方針

次に、今回の修復にあたっての基本的な方針を述べる。¹¹

現在の美術、文化財の修復作業には4つの基本原則がある。

第一は、識別性。すべての修復処置、修復によって付加された部分はオリジナルの部分と判別できるように処置される必要があるということである。

第二は、可逆性。すべての修復処置、修復によって付加された部分はオリジナルをいっさい損じることなく、いつでも取り除けるものでなければならないということである。

第三は、適合性。これは、修復処置に使用されているすべての素材は、それが使用されるオリジナル作品に対して、物理的にも美的にも損傷をあ

たえてはならない、ということである。

第四は、最小限の介入。これは、修復処置は、最小限に控えなければならないということである。これには3つの理由がある。第一に、いかなる修復処置もオリジナルに少なからず物理的ストレスをあたえる、第二に、可逆性があり耐久性があつて、作品に損傷をあたえないというような修復素材が少ない、第三に、作品のもつ外部（美観）・内部（素材）の歴史的・構造的インフォメーションを温存することができる。以上である。

現在は、原型（オリジナル）を最優先してなるべく手を加えないというのが修復の第一原則である。どうしても処置が必要なときは、長い時間がたっても変質しにくく、後で取り除きやすい材料を使って作業し、医者のカルテに相当する記録（作業報告書）を残す必要がある。¹²

5 作業工程

実際、本資料の修復作業では、まず襖全体に発生したカビ取りの作業から始めた。作業の工程は、以下に述べるとおりである。

- 1 刷毛と掃除機を使い、カビの胞子が飛び散らないように除去する。
- 2 次に襖の椽を弛め、引手はずし、本紙を丁寧にはがす。
- 3 本紙を紙継の部分から3分割に切り離す。
- 4 本紙をステンの洗い桶に入れ、温湯で洗浄する（煤洗いと染み抜きをする）。本資料は、焼けによる黄変がはげしいので、さらに薬品を使い、酸化還元法で2回洗浄する。
- 5 本紙の旧肌裏を除去し、鉄サビの部分は小刀で削り取る。
- 6 本紙を共紙の画仙紙で肌裏打ちをする。
- 7 本紙の修復を施し、裏打ち（増裏、総裏）をする。
- 8 襖の骨格と椽を4枚製作する（秋田杉、ステンレス釘を使用）。
- 9 襖骨格の下張り（骨縛り）をする。
- 10 襖骨格下張り（蓑張り）をする。
- 11 襖骨格の下張り（蓑押え張り）をする。
- 12 襖骨格の下袋張りを掛ける。

- 13 襖骨格の上袋張りを掛ける。
 - 14 襖の表面に「松鷹図」、裏面に「芦雁図」を張る。
 - 15 襖の椽は漆代用の黒上塗りとする。
 - 16 襖に椽打ちをし、新たに引手を取り付け、完了となる。
- ここまで使用した材料は、以下のとおりである。

作業・部分	材 料	糊
骨縛り	障子用和紙	みやび糊
裏張り	茶チリ紙	同上
裏押え張り	新鳥の子紙	同上
下袋張り	上茶チリ紙	同上
上袋張り	新細川紙	同上
本紙肌裏	綿料重単箋	同上
本紙増裏	石州薄口	同上
本紙総	みす特厚	同上
本紙張込	上記三枚	のりいちばん +みやび糊
襖骨格・襖椽	天然秋田杉・ 漆代用黒上塗	
引手	黒剣御殿 (大)	

6 修復工程

次に、修復の工程を、「松鷹図」の白鷹が描かれた部分（「松鷹図」第二面上）を例として詳述する。

1 修復前

白鷹の目のあたりに横に広がる亀裂、茶褐色に焼けた本紙、さらに一面にカビなどの傷みが見られる。まず、表面のカビ、埃などを除去し、襖から本紙を剥がす。このままだと本紙が大きくステンレスの洗い桶に入らないので、継ぎ目部分から三分割に切り離し作業を進める（写真13）。

2 温湯による洗浄、肌裏の除去、肌裏の裏打ち（写真14）。

温湯による洗浄で煤洗いと染み抜きをし、旧肌裏を除去する。ある程度の汚れは落ちるが、まだ本紙の変色はかなり濃い。薬品による洗浄に耐えられるように、同じような画仙

紙で肌を打って本紙を補強する。次に精製水で希釈したドーサ（礬水）液を白鷹の部分に塗り、絵の具を止める。

3 薬品による洗浄、一回目（写真15）

薬品による洗浄方法は、一般的な過マンガン酸カリウム（ KMnO_4 ）と亜硫酸ソーダ（ NaHSO_3 ）、蓚酸（ $\text{HOOC}-\text{COOH}$ ）を使用する酸化還元法である。現在は、表具用の「紙の洗い」などの製品があり、それを使用する。本紙の変色はやや薄くなってきたが、まだムラが残っているのもう一度洗浄する。

4 薬品による洗浄、二回目（写真16）

後日に、さらにもう一度薬品洗浄を繰り返す。最後に薬品が残留しないように、水洗いを十分に行い、pH検知器で酸性から中性になっていることを確認する。本紙の変色はかなり薄くなってきた。さらなる薬品洗浄は本紙の材質の耐久力、墨や絵の具の剥落などの関係で無理なので、これ以上は行わない。

5 増し裏の裏打ち、補彩を施す（写真17）

本紙に薄口の和紙で裏打ちし、仮張りに張る。亀裂や破れなどの白く見える穴の部分に、精製水で希釈したドーサ液を2～3回塗って乾かす。補彩は黒色の部分は薄墨で、余白の部分は煤水で染める。何回か繰り返し、色を合わせていく。ほとんど欠損部分が目立たなくなったら修復を終える。

6 修復後（写真18）

修復を終えた、三分割した本紙をもとどおりに継いでから、厚口の和紙で総裏の裏打ちをし、襖骨に下張り、袋張りした後に張り込む。最後に黒塗りの椽を打ちつけ、新しい引手を取り付けて完成となる。

7 修復仕様

修復作業終了後の資料の仕様は次のとおりである（「松鷹図」写真19～22、「芦雁図」写真23～26とも）。

形式 四枚立両面幅広襖

寸法 本紙) 168.2×418.0 (cm)

襖骨) 168.2×104.5 (cm)

襖椽) 見付・縦) 3.3cm

上下) 4.8cm

見込) 3.3cm

なお、「破損状態に関する所見」で紹介した各部分は、写真27～29のようである（前掲写真10～12に対応）。

8 おわりに

冒頭に述べたように、資料保存の重要性についての関心は高まっているが、いまだ正しいあり方についての認識が一般化しているとはいえない。たとえば、私たちの調査において、歴史上著名な人物によって「折り紙」という形式を用いて書かれた書簡が、横中央部分から無惨に切断され、掛け軸に変貌して床の間にかけていることもめずらしいことではない。資料保存に対する正しい認識を欠くと、せっかくの行為が資料の破壊をまねくこともある。本報告は、襖絵という特殊な場合を対象とした一例にすぎないが、資料修復についての正しい理解をすすめる一助となれば幸いである。

なお、「はじめに」においても述べたが、本報告は、木村明夫氏の詳細な報告書にもとづいて、金森が文章化したものである。破損状況や修復に関する貴重な知見はすべて木村氏の業績に負うものであるが、文章表現などの稚拙さからくる誤解を招く表現や誤りの責任はすべて金森にあることを付言しておく。

(追記)「遐邇新聞」の発見

この襖絵の修復作業中に、下張りの押え張りに「遐邇新聞」が使用されていることが確認された。「遐邇新聞」は、明治7年（1874）2月2日に刊行された、現「秋田魁新報」の前身である。新聞は、表面に薄糊を付け、無地の裏面を表に出し、押え張りとして張り込まれていたが、約100年の間に糊が涸れ、軽く篋を入れると容易に剥がせる状態であった。確認された「遐邇新聞」は、明治9年5月10日刊行の第65号から、明治11年7月15日刊行の第618号までのうちの69枚である（写真30～32）。

- 1 天保8年（1837）～明治33年（1900）。明治期秋田画壇における第一人者。寺崎広業・土屋秀禾の師にあたる。
- 2 小室の生年中において「壬午」にあたるのは明治15年である。
- 3 剥がれ（ハガレ） 本紙や切り継ぎの部分に糊離れを生じた状態。古くなると糊が涸れて離れてきたり、裏打ちが甘かったりすると、本紙や表装が自然に剥がれてくることがある。
- 4 破れ（ヤブレ） 本紙や表装が裂けたり、一部欠損した状態。人為的な原因のほか、経年変化による紙や材料の耐久性の劣化が原因で裂けを生じることがある。
- 5 傷（イタミ） 本紙や表装に、穴、裂け痕、折れ、剥がれ、相剥ぎ、その他損傷のあることを総称してイタミという。
- 6 虫喰い（ムシクイ） 虫喰み（ムシバミ）とも。本紙に虫の食害による穴のあるもの。掛軸や古文書などの紙本を食べる昆虫としては、シバンムシ類、シミ類、ゴキブリ類、シロアリ類、ヒョウホンムシ類、チャタテムシ類などがあげられる。また、イガ類などは掛軸をしまうときに掛軸の裏に卵を産みつけ、それが箱に入っている間に羽化して幼虫がその掛軸を食害する。掛軸を開くと等間隔に穴があいているのはこのためである。また、絹本を食害する昆虫としては、カツオブシムシ類、ゴキブリ類、シミ類などがあげられる。
- 7 嘗め（ナメ） 虫が紙の表面をなめるように浅く食害すること。シミ類は糊付けした和紙を好み、表面的な被害であるため、生きている消しゴムといわれ、画や文字が消えてしまうことがある。
- 8 焼け（ヤケ） 本紙（紙本、絹本）が経年変化で変色することを総称してヤケルという。または、黄変（オウヘン）ともいう。その原因は複雑であるが、光（特に紫外線）、湿気、空気中の汚染が主な原因であるといわれている。
- 9 煤（スス） 本紙に煙りや大気中の埃や汚染物が付着して黒く変色した状態。
- 10 染み（シミ） 本紙や表装に付いた汚染。カビによる染みは斑点状に、雨染みは縦に垂れ下がるように痕が残る。染みは、雨漏りやカビ、虫の糞など自然に生じるものがある。また、絵の具、表装材料や料紙に使われている。金属、防腐剤、漂白剤などで材料が酸化してできることもある。
- 11 ランビエンテ修復芸術学院絵画修復科HPを参照した。
- 12 『紙の大百科』美術出版社。

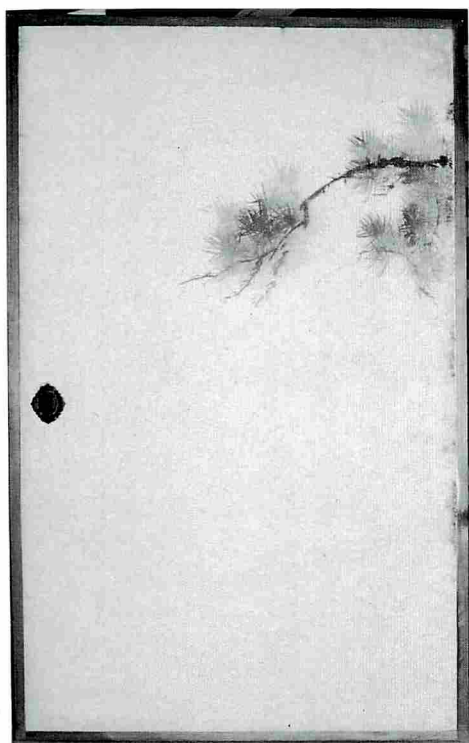


写真1



写真2



写真3

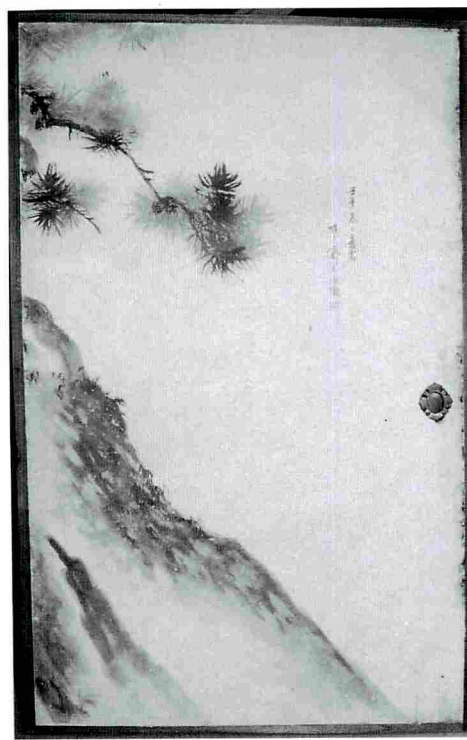


写真4

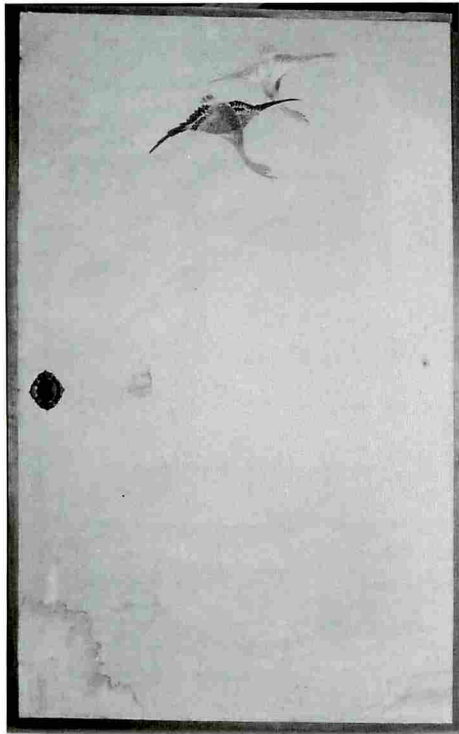


写真5



写真6



写真7



写真8

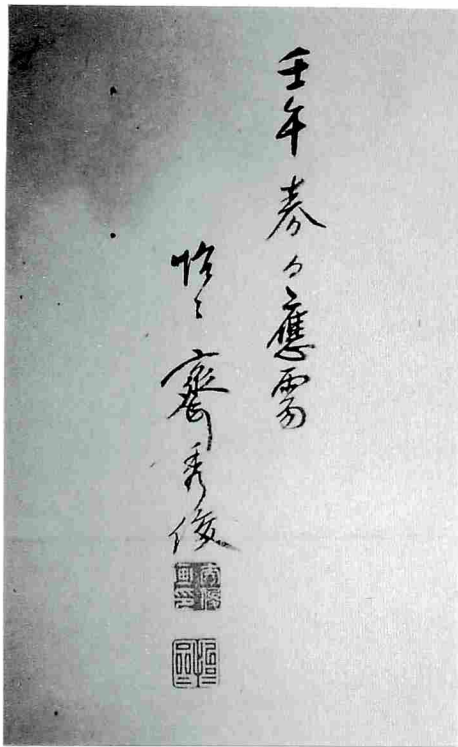


写真9



写真10



写真11

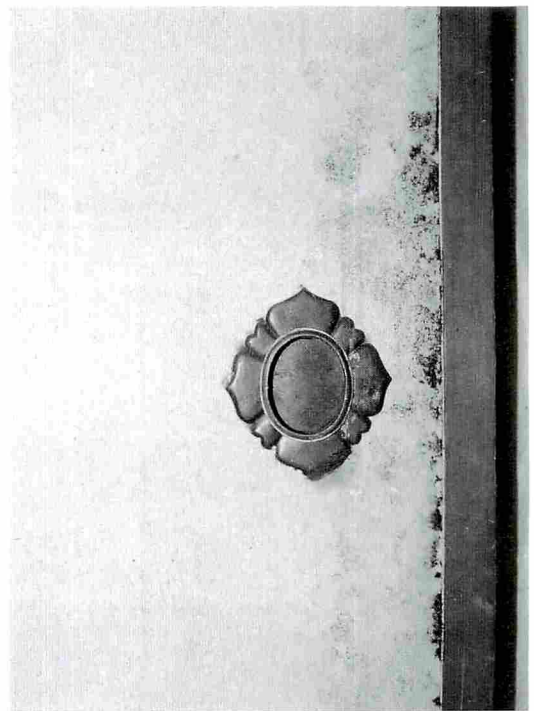


写真12

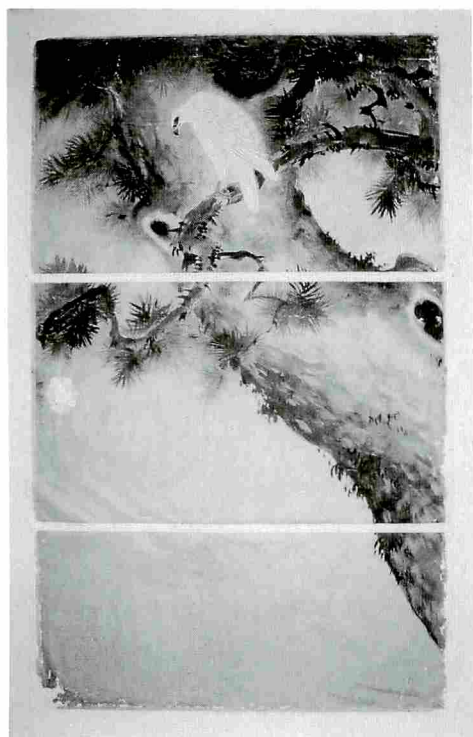


写真13



写真14



写真15

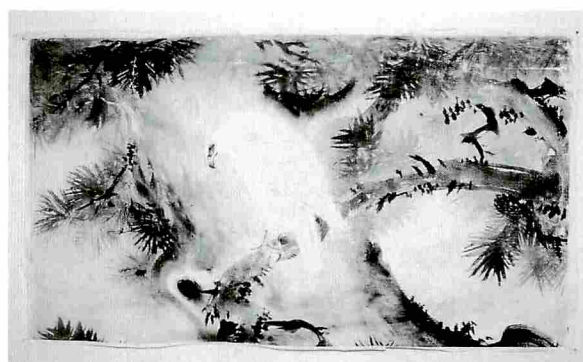


写真16

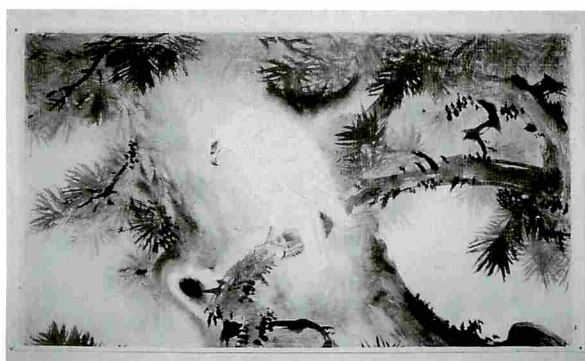


写真17



写真18

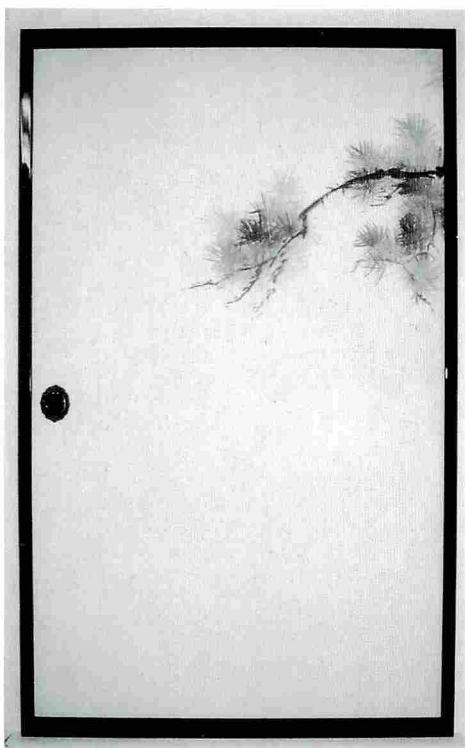


写真19



写真20



写真21



写真22

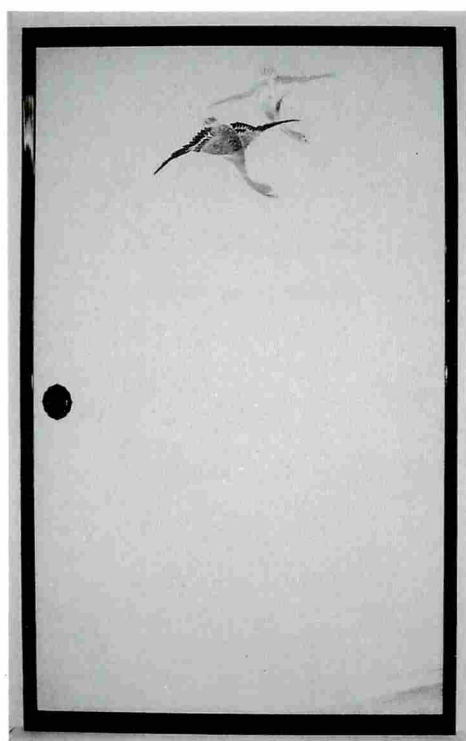


写真23



写真24



写真25



写真26

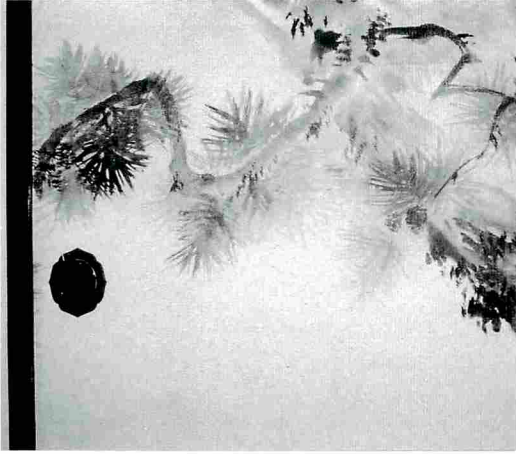


写真27

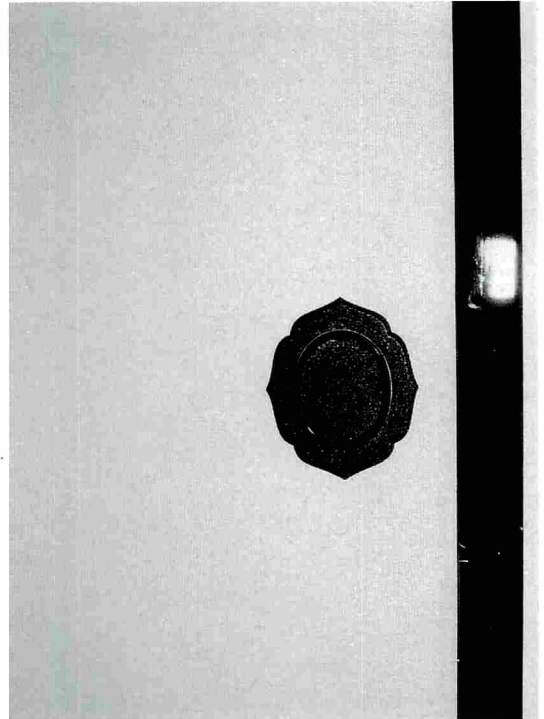


写真28

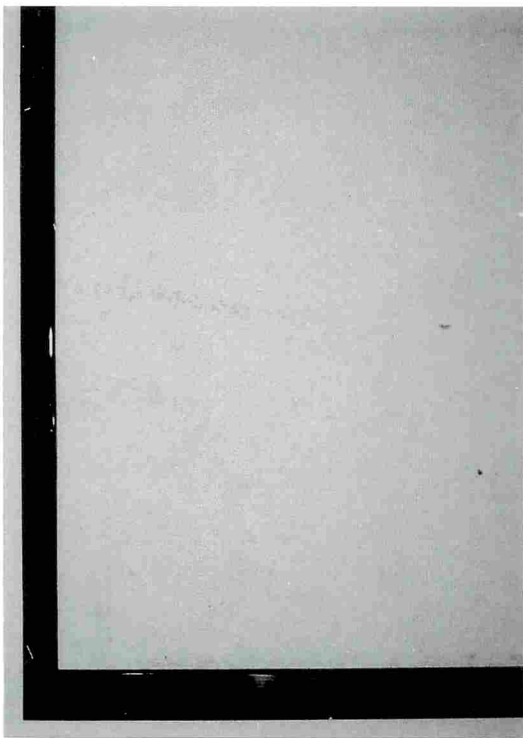


写真29

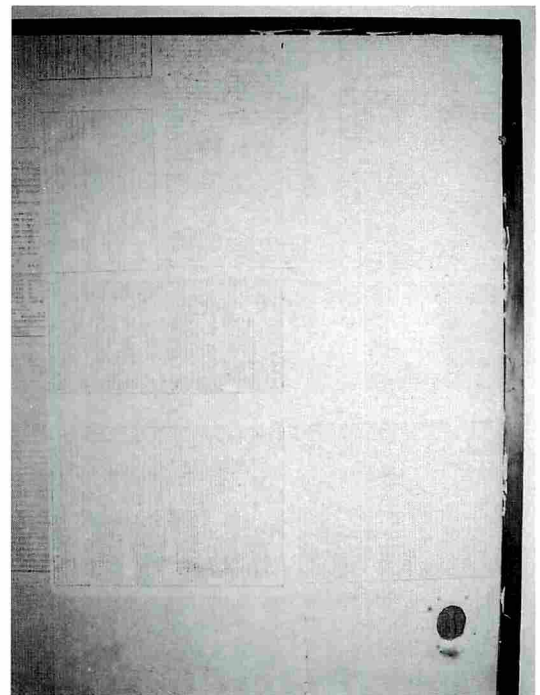


写真30

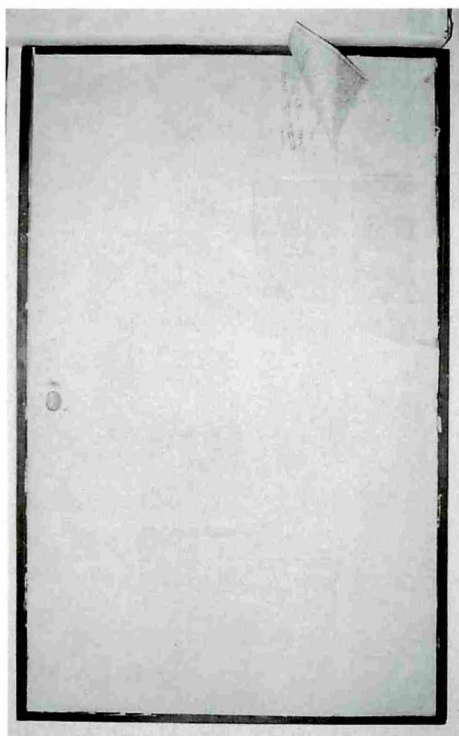


写真31



写真32